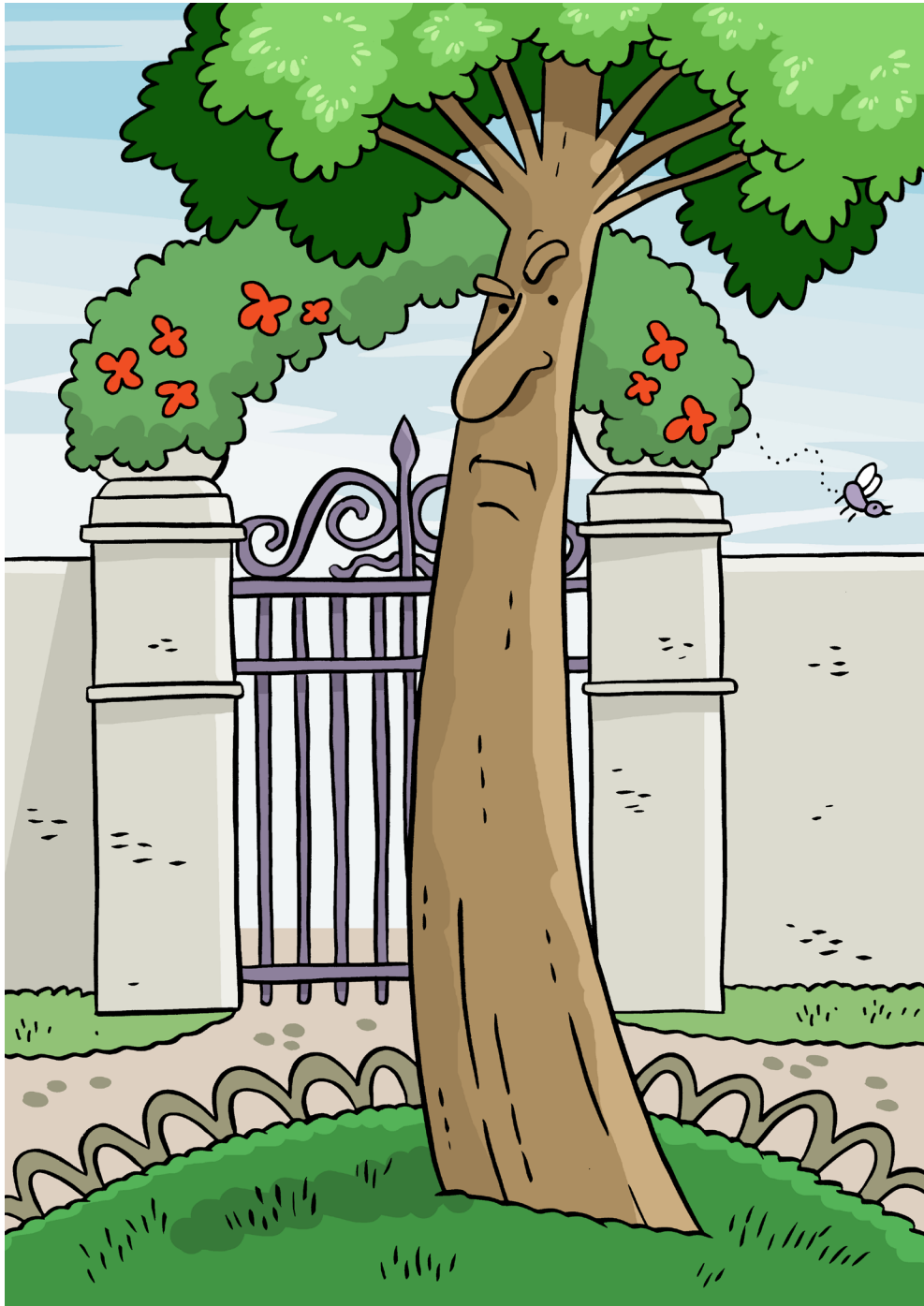




みんなの おじいちゃんツリー

きれいな^{ていえん}庭園に、最高に^{さいこう}申し分の^{もう ぶん}ない、1本の^{いっほん}美しい^{うつく}木が^き立っていました。^{えだ}枝は
空に^{そら}向かって^む伸び、^の美しく^{うつく}つやのある^は葉が^はおい残っていました。その木は、まるで
おうじ^{おうじ}でも^もあるかのように、美しい^{うつく}庭園の^{ていえん}真ん中に^ま高く^{なが}そびえていました。すべてが
かん^{かん}へき^{へき}完璧でした。庭園はよく^{てい}手入れされ、芝生も^{しば}丹念に^{たんねん}刈られていて、^か枯れ葉は^は一枚
の^い残らず^いていないに^いそうじ^いされていました。

この^{うつく}美しい^{ていえん}庭園の^{そと}外には、へいを^{てい}へだてて、手入れの^いされていない、みすほらしい
木が^き立っていました。その木は^き見栄えも^み悪く、^{わる}枝は^{えだ}四方八方に^{しほうはつほう}伸び放題でした。
刈り込みなどをしてくれる^{ひと}人は、だれも^きいません。その木は、^{とお}通りすがりの^{ひと}人達の^{はたら}
笑い物^{わら}になっていました。切りた^きおすべき^いだと言う^{ひと}人達も^{はたら}いましたが、「そのうち
やく^{やく}に^た立つかも。」と言う^い人達も^{ひと}いました。

王子のような堂々とした木は、へいごしにこちらを見下ろして
じまんしました。「わたしを見てみなさい。とてもたくましくそびえて
いるだろう。みきも全く完璧さ。枝も、空に向かってしっかり伸びて
いるぞ。それに比べると、君は何て貧弱なんだ！ たれ下がっている
枝だってあるじゃないか。一体だれがお前さんを見たいっていうんだい？」

小さいあわれな木には、返す言葉もありません。きつと、大きな木の
言うことは正しいのでしょうか！ 自分は確かに美しいとは言えないし、
立ち止まって見てくれる人もいませんから。

季節が移り変わり、毎年春になると、この小さな木に若葉が芽生え、
枝も増えていきました。それが、この木に希望を与えてくれました。
もしがしたら、いつか、何かの役に立てるかも。いつか、だれかが自分を
必要としてくれるようになるかも…。

そして、年月が過ぎていきました。庭園の中では、王子のような木は、
ますます強く、高く、たくましくなりました。彼はへいごしに、この
独特な形をした木をバカにし続けました。「何てみじめなやつなんだ！
私は、ますます堂々として完璧になっているのに！ お前には
木と呼ばれる価値さえないじゃないか。切りたおされて当然だな。」

さて、数年後のある春のこと、びっくりするような、すてきなことが
起こりました。つつましい一つの小さな花が、独特な形の木の枝の
先に、姿を表したのです。それから花は二つ、三つと増えていって、
ついに木全体が、この上もなく見事な白い花の衣に身を包まれるまでに
なりました。それはそれは美しく、木は幸せでいっぱいになりました！

まもなくすると、一つ一つの花が、最高に素晴らしいものに取って
代わり始めました。実をつけ始めたのです。始めは小さなボールのよう
でしたが、日に日に大きくなっています。この独特な形をした木は、
すべての実に栄養を送るのに大いそがしでした。

ひとたび実がじゅくすと、子供達が来て、実をつむために木に
登り始めました！ お父さん達やお母さん達や子供達がやって来ては、
枝々から取った実でかごをいっぱいにしていきました。木は、自分が
独特な形をしていて枝も低くなっているので、みんなが実を取るのに
登りやすいことをうれしく思いました。王子のように見かけは美しく
ありませんが、この方が、はるかに役に立ちました。

ある秋のこと、人々はこの木を記念し、音楽とダンスでお祭りを
することにしました！ 独特な形をした木には、ヒカヒカするライト
までがざり付けられました。周りにはテーブルが置かれ、子供達は
木登りをして遊びました。実に盛大なお祝いでした。人々はその木を、
「りんごの木の王様」に決定しました！

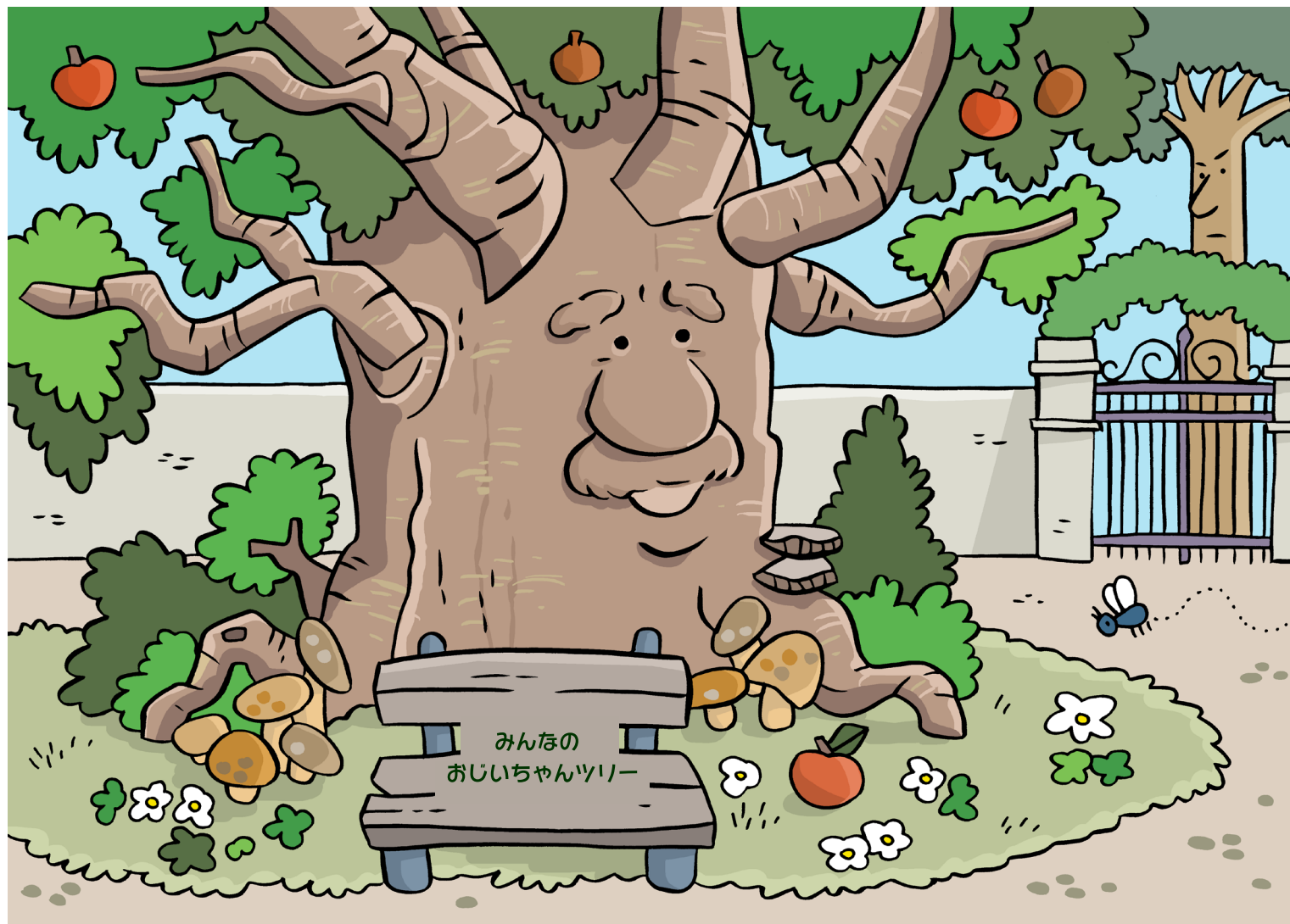
木は思いました。（みんなから忘れられ、貧弱で小さかった私が、
今では実をつけ、パーティーの主人公になれたなんて。）

りんごの木は、この喜びをだれかと
分かち合いたいと思いましたが、壁の
向こう側の木にも、周りに集まってきた
家族や楽しそうな子供達を見て楽しんで
もらえたらなあと思いましたが、庭園以外は、
王子の完璧な庭園に入ることは許されて
いないのです。

そしてある日、その土地に新しい家々を
建てるために、大きな機材が庭園に
運び込まれ、地面が掘り起こされました。
完璧だったその庭園はつぶされたのです。
かつては王子のようだった木も切り
たおされ、運び去られてしまいました。

このころまでには、独特な形をした
りんごの木も年を取り、切りたおされる
かのように思われましたが、実際は、
みんなに愛されたこの木は、周りに
ベンチが置かれ、新しい広場の中心と
なりました。おまけに、「みんなの
おじいちゃんツリー」と名付けられて、
立て札まで立てられたのでした。

(こんなこと、一体だれが予想した
だろう？ 枝がそこら中に伸び放題の
貧弱で小さな木だった私が、今では
この新しい村の広場の中心になると
いう栄誉を与えられているなんて！)と、
りんごの木は物思いにふけるのでした。



教訓：自分には才能や生きている目的があるんだろうかと思ったら、あせらず忍耐を持ちましょう。
このりんごの木の枝のように、いつかあなたの人生は花開き、結果が現れてくるでしょう。
そして、自分だけの有用性や才能を発見できるでしょう。外見だけでだれかの有用性や美しさは分かりません。
ですから、内なる美を見い出すようにしましょう。その結果として芽生える友情や喜びに、おどろかされるでしょう。